

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

アミノアルキルメタクリレートコポリマー E

新	旧
<p>性状</p> <p>本品は淡黄色の樹脂よ<u>うの粒又は白色の粉末</u>で、においはないか、又はわずかに特異なにおいがあり、味はない。</p> <p>本品はメタノール、エタノール (95)、アセトン又はジエチルエーテルに溶けやすく、水にほとんど溶けない。</p> <p>本品は希塩酸に溶ける。</p>	<p>性状</p> <p>本品は淡黄色の樹脂よ<u>うの粒又は粉末</u>で、においはないか、又はわずかに特異なにおいがあり、味はない。</p> <p>本品はメタノール、エタノール (95)、アセトン又はジエチルエーテルに溶けやすく、水にほとんど溶けない。</p> <p>本品は希塩酸に溶ける。</p>
<p>純度試験</p> <p>(3) ヒ素 本品を粉末とし、その 1.0g をとり、第 3 法により検液を調製し、<u>試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>	<p>純度試験</p> <p>(3) ヒ素 本品を粉末とし、その 1.0g をとり、第 3 法により検液を調製し、<u>装置 B を用いる方法により試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

エチルセルロース

新	旧
<p>純度試験</p> <p>(5) ヒ素 本品 1.0g をとり、第 3 法により検液を調製し、<u>試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>	<p>純度試験</p> <p>(5) ヒ素 本品 1.0g をとり、第 3 法により検液を調製し、<u>装置 B を用いる方法により試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>
<p>定量法</p> <p>本品を乾燥し、その約 0.015g を精密に量り、次に示す操作法により試験を行う。</p> <p>試液</p> <p><u>(1) 洗淨液 赤リン 1g を水 100mL に懸濁させる。</u></p> <p><u>(2) 吸収液 酢酸カリウム 15g を酢酸 (100) / 無水酢酸混液 (9 : 1) 150mL に溶かし、その 145mL を量り、臭素 5mL を加える。用時製する。</u></p> <p>操作法</p> <p><u>ガス洗淨部 E に洗淨液を約 1/2 の高さまで入れ、また、吸尿管 J に吸収液約 20mL を入れる。</u></p> <p><u>本品を乾燥し、その約 0.015g を精密に量り、分解フラスコ A に入れ、次に沸騰石とヨウ化水素酸約 6mL を加える。A のすり合わせ連結部 C をヨウ化水素酸 1 滴でぬらして空冷部 D に接続し、更に球面すり合わせ連結部 G を適当なシリコン樹脂をつけて連結し、装置を組み立てる。ガス導入管 B より窒素又は二酸化炭素を通じ、適当な調節器を用いて E 中に出る気泡が 1 秒につき 2 個程度になるように調節する。A を油浴に浸し、浴の温度が 20~30 分後、150°C になるように加熱し、更に同温度で 60 分間煮沸する。油浴を外し、ガスを通したまま放冷し、冷後、G を取り外し、J の内容物を酢酸ナトリウム三水和物溶液 (1→5) 10mL を入れた 500mL の共栓三角フラスコに流し出し、水で数回洗い込み、更に水を加えて約</u></p>	<p>定量法</p> <p>本品を乾燥し、その約 0.015g を精密に量り、<u>メトキシ基の定量法に準じて試験を行う。</u></p> <p>0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム液 1mL = 0.7510mg OC₂H₅</p>

200mL とする。振り混ぜながら臭素の赤色が消えるまでギ酸を滴加した後、更に 1mL を加える。次にヨウ化カリウム 3g 及び希硫酸 15mL を加え、栓をして軽く振り混ぜ、5 分間放置した後、遊離したヨウ素を 0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム液で滴定する（指示薬：デンプン試液 1mL）。同様の方法で空試験を行い、補正する。

0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム液 1mL =
0.7510mg OC_2H_5

[図：省略]

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

エチルセルロース水分散液

新	旧
<p>定量法 <u>本品を乾燥し、その約 0.1g を精密に量り、次に示す操作法により試験を行う。</u></p> <p>試液 <u>(1) 洗浄液 赤リン 1g を水 100mL に懸濁させる。</u> <u>(2) 吸収液 酢酸カリウム 15g を酢酸 (100) / 無水酢酸混液 (9 : 1) 150mL に溶かし、その 145mL を量り、臭素 5mL を加える。用時製する。</u></p> <p>操作法 <u>ガス洗浄部 E に洗浄液を約 1/2 の高さまで入れ、また、吸尿管 J に吸収液約 20mL を入れる。本品を乾燥し、その約 0.1g を精密に量り、分解フラスコ A に入れ、次に沸騰石とヨウ化水素酸約 6mL を加える。A のすり合わせ連結部 C をヨウ化水素酸 1 滴でぬらして空冷部 D に接続し、更に球面すり合わせ連結部 G を適当なシリコン樹脂をつけて連結し、装置を組み立てる。ガス導入管 B より窒素又は二酸化炭素を通じ、適当な調節器を用いて E 中に出る気泡が 1 秒につき 2 個程度になるように調節する。A を油浴に浸し、浴の温度が 20~30 分後、150℃になるように加熱し、更に同温度で 60 分間煮沸する。油浴を外し、ガスを通したまま放冷し、冷後、G を取り外し、J の内容物を酢酸ナトリウム三水和物溶液 (1→5) 10mL を入れた 500mL の共栓三角フラスコに流し出し、水で数回洗い込み、更に水を加えて約 200mL とする。振り混ぜながら臭素の赤色が消えるまでギ酸を滴加した後、更に 1mL を加える。次にヨウ化カリウム 3g 及び希硫酸 15mL を加え、栓をして軽く振り混ぜ、5 分間放置した後、遊</u></p>	<p>定量法 <u>本品を乾燥し、その約 0.015g を精密に量り、メトキシ基の定量法に準じて試験を行う。</u></p> <p><u>0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム液 1mL = 0.7510mg OC₂H₅</u></p> <p><u>エチルセルロースの<u>エトキシ基</u>含有率は表示値を用いる。</u></p>

離したヨウ素を 0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム
液で滴定する（指示薬：デンプン試液 1mL）。

同様の方法で空試験を行い、補正する。

0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム液 1mL =
0.7510mg OC₂H₅

エチルセルロースのエトキシ基含有率は表
示値を用いる。

[図：省略]

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

エリスリトール

新	旧
純度試験 (5) ヒ素 本品 1.0g をとり、第 1 法により検液を調製し、 <u>試験を行う</u> (2ppm 以下).	純度試験 (5) ヒ素 本品 1.0g をとり、第 1 法により検液を調製し、 <u>装置 B を用いる方法により試験を行う</u> (2ppm 以下).
貯法 容 器 密閉容器.	貯法 <u>保存条件 冷所に保存する.</u> 容 器 密閉容器.

黄色三二酸化鉄

表記に関して改正点はないが、準用先の「三二酸化鉄」の改正に伴う改正品目。

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

カルボキシメチルエチルセルロース

新	旧
<p>純度試験</p> <p>(5) ヒ素 本品 1.0g をとり、磁製のつぼ入れ、これに硝酸マグネシウム六水和物のエタノール (95) 溶液 (1→10) 10mL を加え、エタノール (95) に点火して燃焼させた後、徐々に加熱して灰化する。冷後、残留物に塩酸 3mL を加え、水浴上で加温して溶かし、<u>検液とし、試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>	<p>純度試験</p> <p>(5) ヒ素 本品 1.0g をとり、磁製のつぼ入れ、これに硝酸マグネシウム六水和物のエタノール (95) 溶液 (1→10) 10mL を加え、エタノール (95) に点火して燃焼させた後、徐々に加熱して灰化する。冷後、残留物に塩酸 3mL を加え、水浴上で加温して溶かし、<u>装置 B を用いる方法により試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>
<p>定量法</p> <p>(2) <u>エトキシ基</u> 本品を乾燥し、その約 0.025g を精密に量り、<u>次に示す操作法により試験を行う。</u></p> <p>試液</p> <p>(1) <u>洗浄液</u> 赤リン 1g を水 100mL に懸濁させる。</p> <p>(2) <u>吸収液</u> 酢酸カリウム 15g を酢酸 (100) / 無水酢酸混液 (9 : 1) 150mL に溶かし、その 145mL を量り、臭素 5mL を加える。用時製する。</p> <p>操作法</p> <p><u>ガス洗浄部 E に洗浄液を約 1/2 の高さまで入れ、また、吸気管 J に吸収液約 20mL を入れる。本品を乾燥し、その約 0.025g を精密に量り、分解フラスコ A に入れ、次に沸騰石とヨウ化水素酸約 6mL を加える。A のすり合わせ連結部 C をヨウ化水素酸 1 滴でぬらして空冷部 D に接続し、更に球面すり合わせ連結部 G を適当なシリコン樹脂をつけて連結し、装置を組み立てる。ガス導入管 B より窒素又は二酸化炭素を通じ、適当な調節器を用いて E 中に出る気泡が 1 秒につき 2 個程度になるように調節する。A を油浴に浸し、浴の温度が 20~30 分後、150℃になるように加熱</u></p>	<p>定量法</p> <p>(2) <u>エトキシ基</u> 本品を乾燥し、その約 0.025g を精密に量り、<u>メトキシ基定量法を準用する。</u></p> <p>0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム液 1mL = 0.7510mg OC₂H₅</p>

し、更に同温度で 60 分間煮沸する。油浴を外し、
ガスを通したまま放冷し、冷後、G を取り外し、
J の内容物を酢酸ナトリウム三水和物溶液(1→5)
10mL を入れた 500mL の共栓三角フラスコに流
し出し、水で数回洗い込み、更に水を加えて約
200mL とする。振り混ぜながら臭素の赤色が消
えるまでギ酸を滴加した後、更に 1mL を加える。
次にヨウ化カリウム 3g 及び希硫酸 15mL を加え、
栓をして軽く振り混ぜ、5 分間放置した後、遊離
したヨウ素を 0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム液で
滴定する（指示薬：デンプン試液 1mL）。同様の
方法で空試験を行い、補正する。

0.1mol/L チオ硫酸ナトリウム液 1mL =
0.7510mg OC_2H_5

[図：省略]

[主な改正部分の新旧対照表（下線部分は改正部分を示す）]

還元麦芽糖水アメ

新	旧
削除	<u>乾燥減量</u> <u>25.0%以下（1g, 減圧・0.67kPa 以下, 105℃, 5時間）</u>
<u>水分</u> <u>25.0%以下（0.1g, 容量滴定法, 直接滴定）</u>	<u>規定なし</u>

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

乾燥メタクリル酸コポリマー LD

新	旧
<p>確認試験</p> <p>(4) 本品 <u>5g</u> に水/メタノール混液 (1:1) 30mL を加え、室温で約 2 時間かけて溶かす。この溶液をろ過し、ろ液を試料溶液とする。試料溶液 0.1mL にメチレンブルー試液 0.1mL 及び希硫酸 2mL を加え、更にジクロロメタン 2mL を加え、振り混ぜて静置するとき、ジクロロメタン層は濃青色を呈する。</p>	<p>確認試験</p> <p>(4) 本品 <u>5mg</u> に水/メタノール混液 (1:1) 30mL を加え、室温で約 2 時間かけて溶かす。この溶液をろ過し、ろ液を試料溶液とする。試料溶液 0.1mL にメチレンブルー試液 0.1mL 及び希硫酸 2mL を加え、更にジクロロメタン 2mL を加え、振り混ぜて静置するとき、ジクロロメタン層は濃青色を呈する。</p>
<p>純度試験</p> <p>(2) ヒ素 本品 1.0g をとり、第 3 法により検液を調製し、<u>試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>	<p>純度試験</p> <p>(2) ヒ素 本品 1.0g をとり、第 3 法により検液を調製し、<u>装置 B を用いる方法により試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

クエン酸二水素ナトリウム

新	旧
<p>純度試験</p> <p>(7) ヒ素 本品 1.0g をとり, 第 1 法により検液を調製し, <u>試験を行う</u> (2ppm 以下).</p>	<p>純度試験</p> <p>(7) ヒ素 本品 1.0g をとり, 第 1 法により検液を調製し, <u>装置 B を用いる方法により試験を行う</u> (2ppm 以下).</p>
<p>定量法</p> <p>本品を乾燥し, その約 <u>0.18g</u> を精密に量り, 水 <u>25mL</u> に溶かし, <u>0.1mol/L 水酸化ナトリウム液</u> で滴定する (指示薬: <u>フェノールフタレイン試液 2~3 滴</u>). <u>同様の方法で空試験を行い, 補正する.</u></p> <p><u>0.1mol/L 水酸化ナトリウム液 1mL = 10.71mg</u> C₆H₇NaO₇</p>	<p>定量法</p> <p>本品を乾燥し, その約 <u>2g</u> を精密に量り, 水 <u>10mL</u> に溶かし, <u>0.25mol/L 硫酸 30mL</u> を正確に加え, <u>過量の硫酸を 0.5mol/L 水酸化ナトリウム液</u> で滴定する (指示薬: <u>メチルレッド・メチレンブルー試液 2 滴</u>). <u>ただし, 滴定の終点は液の赤紫色が灰青色を経て緑色に変わるときとする. 同様の方法で空試験を行う.</u></p> <p><u>0.25mol/L 硫酸 1mL = 107.05mg</u> C₆H₇NaO₇</p>

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

黒酸化鉄

新	旧
<p>純度試験</p> <p>(2) 重金属 本品 1.0g を磁製皿にとり、薄めた塩酸 (1→2) 20mL を加え、加温して溶かし、1mL になるまで蒸発濃縮した後、王水 6mL を加え、水浴上で蒸発乾固する。残留物に 6mol/L 塩酸試液 5mL を加えて溶かし、分液漏斗に移す。磁製皿は 6mol/L 塩酸試液 5mL ずつで 2 回洗い、洗液は分液漏斗に合わせ、ジエチルエーテル 40mL で 2 回、次にジエチルエーテル 20mL で振り混ぜた後、静置し、分離したジエチルエーテル層を除く。水層に塩酸ヒドロキシアニモニウム <u>0.2g</u> を加えて溶かし、水浴上で 10 分間加熱した後、フェノールフタレイン試液 1 滴を加え、液が薄い紅色を呈するまでアンモニア水 (28) を加える。冷後、液が無色となるまで希酢酸を滴加し、<u>次いで希酢酸 4mL を加えてよく振り混ぜ、必要があればろ過し、水を加えて 50mL とする。</u>これを検液とし、試験を行う。比較液は鉛標準液 3.0mL をとり、薄めた塩酸 (1→2) 20mL を加え、以下検液と同様に操作する (30ppm 以下)。</p> <p>(3) ヒ素 本品 <u>0.2g に薄めた塩酸 (1→2) 30mL を加え、加温して溶かし、水浴上で蒸発濃縮し、約 5mL とする。この液に温湯 5mL を加えてろ過し、残留物は温湯 5mL ずつで 3 回洗い。洗液はろ液に合わせ検液とし、試験を行う (10ppm 以下)。</u>ただし、中和操作及び薄めた塩酸 (1→2) 5mL の添加を省略する。また酸性塩化第一スズ試液の代わりに、塩化スズ (II) の塩酸溶液 (35→100) を用いる。標準色の調製は、<u>塩化スズ (II) の塩酸溶液 (35→100) を用いて日局に準じ操作する。</u></p>	<p>純度試験</p> <p>(2) 重金属 本品 1.0g を磁製皿にとり、薄めた塩酸 (1→2) 20mL を加え、加温して溶かし、1mL になるまで蒸発濃縮した後、王水 6mL を加え、水浴上で蒸発乾固する。残留物に 6mol/L 塩酸試液 5mL を加えて溶かし、分液漏斗に移す。磁製皿は 6mol/L 塩酸試液 5mL ずつで 2 回洗い、洗液は分液漏斗に合わせ、ジエチルエーテル 40mL で 2 回、次にジエチルエーテル 20mL で振り混ぜた後、静置し、分離したジエチルエーテル層を除く。水層に塩酸ヒドロキシアニモニウム <u>0.05g</u> を加えて溶かし、水浴上で 10 分間加熱した後、フェノールフタレイン試液 1 滴を加え、液が紅色を呈するまでアンモニア水 (28) を加える。冷後、液が無色となるまで <u>6mol/L 塩酸試液</u> を滴加し、希酢酸 4mL を加えてよく振り混ぜ、必要があればろ過し、水を加えて 50mL とする。これを検液とし、試験を行う。比較液は鉛標準液 3.0mL をとり、薄めた塩酸 (1→2) 20mL を加え、以下検液と同様に操作する (30ppm 以下)。</p> <p>(3) ヒ素 本品 <u>1.0g に水 10mL を加え、水浴上で静かに加温しながら塩酸 10~20mL を少量ずつ加えて溶かし、更に水浴上で加熱濃縮する。これに水 60mL を加え、かき混ぜてろ過する。残留物を水 5mL ずつで 3 回洗い、洗液をろ液に合わせ、水を加えて 100mL とする。この液 20mL をとり、水浴上で速やかに 80℃ に加熱し、塩酸ヒドロキシアニモニウム 1g を加えた後、10 分間放置する。</u>これを検液とし、試験を行う (10ppm 以下)。</p>

<p>定量法</p> <p>本品約0.2gをヨウ素瓶に精密に量り、塩酸5mLを加えて溶かし、水 25mL 及びヨウ化カリウム3gを加え、密栓し、暗所で15分間放置した後、水100mLを加え、遊離したヨウ素を0.1mol/Lチオ硫酸ナトリウム液で滴定する。ただし、滴定の終点は液が終点近くで淡黄色になったとき、デンプン試液3mLを加え、生じた青色が脱色するときとする。同様な方法で空試験を行い、補正する。</p> <p>0.1mol/Lチオ硫酸ナトリウム液 1mL=7.985mg Fe_2O_3</p> <p>四三酸化鉄 (Fe_3O_4) の量 (%) = 三二酸化鉄 (Fe_2O_3) の量 (%) $\times 0.9666$</p>	<p>定量法</p> <p>本品を乾燥し、その約1gを精密に量り、塩酸30mLを加え、不溶物がほとんど白色になるまで加熱した後、硝酸1mLを加えて更に5分間加熱する。水200mLを加えてろ過し、残留物は水50mLで洗い、洗液をろ液に合わせる。ろ液を加熱し、ろ紙繊維(5種A, 15cmのろ紙1枚の4分の1程度を細かくちぎり、少量の水を加え、激しく振り混ぜるか、加熱してかゆ状にしたもの)を加え、かき混ぜながらアンモニア試液を加えて中和する。液を煮沸し、アンモニア臭がかすかに残ったところで、温時ろ過し(5種A, 15cm)、沈殿は塩化アンモニウム溶液(1→50)20mLずつで3回洗う。沈殿をろ紙とともに質量既知のろつぼに移し、最初は極めて注意しながら加熱し、ろ紙を乾燥し、次いで徐々にろ紙を炭化する。炭化が終わり煙がでなくなれば、450～550℃で炭素が認められなくなるまで強熱する。更に800±25℃で30分間強熱し、デシケーター(シリカゲル)中で放冷した後、その質量を精密に量る。恒量になるまで繰り返す。三二酸化鉄 (Fe_2O_3: 159.69) の量とする。</p> <p>四三酸化鉄 (Fe_3O_4) の量 (mg) = 三二酸化鉄 (Fe_2O_3) の量 (mg) $\times 0.9666$</p>
---	---

[主な改正部分の新旧対照表（下線部分は改正部分を示す）]

三二酸化鉄

新	旧
<p>基原</p> <p>本品を乾燥したものは定量するとき、<u>三二酸化鉄 (Fe₂O₃) 98.0%以上を含む。</u></p>	<p>基原</p> <p>本品は定量するとき、<u>三二酸化鉄 (Fe₂O₃) 98.0%以上を含む。</u></p>
<p>純度試験</p> <p>(2) 重金属 本品 1.0g を磁製皿にとり、薄めた塩酸 (1→2) 20mL を加え、加温して溶かし、1mL になるまで蒸発濃縮した後、王水 6mL を加え水浴上で蒸発乾固する。残留物に 6mol/L 塩酸試液 5mL を加えて溶かし、分液漏斗に移す。磁製皿は 6mol/L 塩酸試液 5mL ずつで 2 回洗い、洗液は分液漏斗に合わせ、ジエチルエーテル 40mL で 2 回、次にジエチルエーテル 20mL で振り混ぜた後静置し、分離したジエチルエーテル層を除く。水層に塩酸ヒドロキシアニモニウム <u>0.1g</u> を加えて溶かし、水浴上で 10 分間加熱した後、フェノールフタレイン試液 1 滴を加え、液が<u>薄い紅色</u>を呈するまでアンモニア水 (28) を加える。冷後、液が無色となるまで希酢酸を滴加し、<u>次いで</u>希酢酸 4mL を加えてよく振り混ぜ、必要があればろ過し、水を加えて 50mL とする。これを検液とし、試験を行う。比較液は磁製皿に鉛標準液 3.0mL をとり、薄めた塩酸 (1→2) 20mL を加え、以下検液と同様に操作する (30ppm 以下)。</p> <p>(3) ヒ素 本品 1.0g に薄めた塩酸 (1→2) 30mL を加え、加温して溶かし、水浴上で蒸発濃縮し、<u>約 5mL とする。この液に温湯 5mL を加えてろ過し、</u>残留物を温湯 5mL ずつで 3 回洗い、<u>洗液はろ液に合わせ検液とし、試験を行う (2ppm 以下)。</u>ただし、中和操作及び薄めた塩酸 (1→2) 5mL の添加を省略する。また、酸性塩化第一スズ試液の代わりに、<u>塩化スズ (II) の塩酸溶液 (35→100)</u></p>	<p>純度試験</p> <p>(2) 重金属 本品 1.0g を磁製皿にとり、薄めた塩酸 (1→2) 20mL を加え、加温して溶かし、1mL になるまで蒸発濃縮した後、王水 6mL を加え水浴上で蒸発乾固する。残留物に 6mol/L 塩酸試液 5mL を加えて溶かし、分液漏斗に移す。磁製皿は 6mol/L 塩酸試液 5mL ずつで 2 回洗い、洗液は分液漏斗に合わせ、ジエチルエーテル 40mL で 2 回、次にジエチルエーテル 20mL で振り混ぜた後静置し、分離したジエチルエーテル層を除く。水層に塩酸ヒドロキシアニモニウム <u>0.05g</u> を加えて溶かし、水浴上で 10 分間加熱した後、フェノールフタレイン試液 1 滴を加え、液が<u>紅色</u>を呈するまでアンモニア水 (28) を加える。冷後、液が無色となるまで <u>6mol/L 塩酸試液</u>を滴加し、希酢酸 4mL を加えてよく振り混ぜ、必要があればろ過し、水を加えて 50mL とする。これを検液とし、試験を行う。比較液は磁製皿に鉛標準液 3.0mL をとり、薄めた塩酸 (1→2) 20mL を加え、以下検液と同様に操作する (30ppm 以下)。</p> <p>(3) ヒ素 本品 1.0g に薄めた塩酸 (1→2) 30mL 及び硝酸 1mL を加え、加温して溶かし、<u>5mL になるまで蒸発濃縮した後、水 15mL を加えてろ過し、</u>残留物を温湯 5mL ずつで 3 回洗い、<u>洗液はろ液に合わせる。この液に硫酸 1mL を加え、白煙の生じなくなるまで蒸発濃縮する。次に亜硫酸水 10mL を加え、2mL になるまで蒸発濃縮した後、</u>水を加えて 5ml とする。これを検液とし、装</p>

<p>を用いる。標準色の調製は、塩化スズ（Ⅱ）の塩酸溶液（35→100）を用いて日局に準じ操作する。</p>	<p>置 B を用いる方法により試験を行う（2ppm 以下）。</p>
<p>強熱減量 2.0%以下（2g, 900℃, 2 時間）。</p>	<p>規定なし</p>

[主な改正部分の新旧対照表 (下線部分は改正部分を示す)]

ジメチルポリシロキサン・二酸化ケイ素混合物

新	旧
<p>純度試験</p> <p>(1) 抽出物試験 本品約 <u>45g</u> をとり、ヘキサン <u>600mL</u> を加えてよく振り混ぜた後、遠心分離管に分取し、遠心分離する。上澄液を分取し、水浴上でヘキサンを減圧留去して得た粘性の液を検液とし、次の試験を行う。</p> <p>(3) ヒ素 本品 1.0g をとり、第3法により検液を調製し、<u>試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>	<p>純度試験</p> <p>(1) 抽出物試験 本品約 <u>30g</u> をとり、ヘキサン <u>400mL</u> を加えてよく振り混ぜた後、遠心分離管に分取し、遠心分離する。上澄液を分取し、水浴上でヘキサンを減圧留去して得た粘性の液を検液とし、次の試験を行う。</p> <p>(3) ヒ素 本品 1.0g をとり、第3法により検液を調製し、<u>装置 B を用いる方法により試験を行う</u> (2ppm 以下)。</p>